

## 契丹佛教文化史考

神尾式春著

昭和十二年一月十五日、滿洲文化協會發行  
 菊版一八五頁、圖版一一葉、定價貳圓

滿洲國內を旅して或は車窓近くに、或は遙か草原の彼方に、或は又疊々として連なる土城址の中に、中天高く聳り立つ八角七層乃至十三層の白聖の佛塔を仰ぐ時、齊しく謂ひ知れぬ崇高な感に打たれると共に、それは何人をも直ちに思ひを當時に於ける佛教の隆盛さに致させずには置かないであらう。之等白塔の多くは遼代又はそれに流を汲む金代の佛塔、所謂遼金塔である。

遼代(契丹)の佛教に關する研究は、本書の跋文及び巻末に附せられた主要参考書目中に掲げられてゐる所によつても窺ひ得る如く、相當多數に上つて居り、筆者も昨年末一小論をものしたことがあるが、本書は正にその集成とも謂ふべきもので、七章より成り、第一章「契丹民族の興亡とその佛教文化の源流」は序説とも謂ふべく、契丹民族がその近隣四周の異民族と古くより有し來つた交渉・關係を論述して、彼等が既に早

くより北支佛教の影響下に在つたことを窺はんとしたものである。

第二章「契丹の寺院」に於ては、上京・東京・中京・南京・西京の五道に存在した諸寺院名を拾く諸文献を涉獵して掲げてゐるが、殊に中京の建置と佛寺造營の關係に説き及んでゐるのは(三三頁)傾聴に値する。

第三章「契丹の佛塔」現存の契丹塔をみるに、喇嘛塔又は純漢式佛塔とは異り一種獨特の形式を有してゐるが、これは契丹民族固有の文化を具現するものにして、北魏その他の非漢族文化に負ふこと尠なからざるものと考定してゐる。

第四章以下に於ては契丹の經典教學及び高僧に就いて考察し、即ち「契丹大藏經」は今日その斷簡隻紙をも留めてゐないが、著者は各種の斷片的記載を博引旁搜してその包藏する佛典の内容並に編帙の形式等に於て宋藏乃至は之に依據した麗(初修)・金・元・明藏とは著しく異なる特徴を有してゐたものと斷じ、その理由を(1)北地に傳はつた系統の異なる佛教を傳承したこと、(2)西域その他塞外諸民族との文化的交流が滋く且つ塞外民族の文化を親しみを以て受容し得たこと、(3)新興契

丹の堅忍不拔な士風は契丹教學に堅實精緻な學風を生んだこと、(4)漢族文化に對抗して契丹獨特の佛教文化を樹立把持せんとする熱意が契丹の指導者階級に滿ちてゐたこと等に求めてゐるが、この外、シャマンとの關係も考慮する要があらう。尙、丹藏・麗藏に關しては、本著と時を同じうして出刊された大屋徳城氏の大著「高麗續藏雕造攷」がある。

第六章「契丹佛教文献の東流」に於ては高麗を經由して我が國に流傳した契丹佛教文献が平安・鎌倉時代の密教學徒に大なる示唆と關心を與へたことを強調してあるが、これに就いては最近の發表に係る塚本善隆氏の「日本に遺存せる遼文學と其の影響」(東方學報京都第七冊)をも併せ讀むべきである。

最後に「金元佛教に對する契丹佛教の寄與」を以て終つてゐるが、金・元佛教と契丹佛教との關係に就いては尙幾多の問題が残されてゐるが故に、この方面に於ける著者の今後の大成を期待して止まない。

さて翻つて、本書全般を通じての著者の立場をみるに、廣く塞外民族が漢族と接觸するや、軍事的政治的交渉に繼いで起るものは文化的角逐にして、かゝる際

常に彼等の固有文化を支へて漢族文化に對抗し來つたものは佛教文化であるとの前提の下に、契丹民族の文化を考察するに當つてもその重點を佛教に置き、彼等が北支那佛教を護持して宋の傳統せる江南佛教に對抗せんと努めたことを強調してゐるが、契丹文化史を扱ふに際し、かかる立場——彼等が絶えずその佛教文化を中心として宋文化の浸潤に對抗せんと努めたとする——が果して妥當的であるか否かは慎重の検討を要するも、著者の如き見解にも亦大なる意義が存すること認めなければならぬであらう。とまれ、著者は滿洲建國の鴻業に翼賛され政務繁忙を極める身なるにも拘らず克くかかる勞作をものされたことに對しては何人も衷心より敬意を捧ぐべきである。(田村實造)